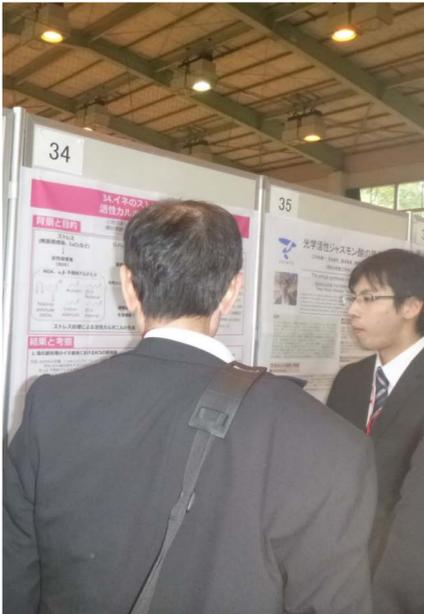
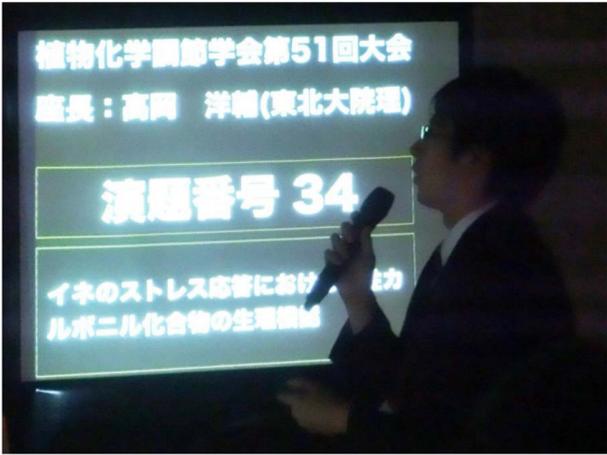


バイオサイエンス学科 学会発表

【発表者について】アンダーラインは本学教員、研究員および技術職員、○は発表者、※は大学院生、卒研生または卒業生

学会名	植物化学調節学会 第51回大会（高知大学物部キャンパス）
演題名	イネのストレス応答における活性カルボニル化合物の生理機能
発表者	○ <u>※</u> 見目凌、 <u>宮本皓司</u> 、 <u>※</u> 石田翼、 <u>※</u> 田代裕也、 <u>※</u> 鶴見明彦、 <u>酒澤智子</u> 、 <u>湯本絵美</u> 、 <u>柴田恭美</u> 、 <u>横田孝雄</u> 、 <u>朝比奈雅志</u> 、 <u>岡田憲典</u> 、 <u>山根久和</u> (植物化学研究室)
内容	<p>植物は様々な環境ストレスに応答して活性酸素種（ROS）を生成する。生成したROSは、リノレン酸などの多価不飽和脂肪酸を過酸化し非酵素的な酸化分解を引き起こしてmalondialdehyde（MDA）を含む短鎖 α, β-不飽和アルデヒドなどの反応性の高い活性カルボニル化合物（RCS: reactive carbonyl species）を生成する。RCSは、反応性が高く毒性を示すが、その一方でストレス応答を誘導するシグナル分子として機能する可能性も考えられている。本研究では、イネの葉に対して塩化銅処理を行った際にRCSが蓄積すること、RCSを処理するとジャスモン酸の内生量が増加することを報告した。このことから、RCSがストレス応答的なジャスモン酸生産を誘導するシグナル分子であることが示唆された。</p> <p>本研究はバイオサイエンス学科植物化学研究室の大学院生が修士論文研究の一環として行ったものである。なお、本発表は私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「植物オキシリピンの生理機能の解明とその応用」による支援を受けて行った。</p>
関連画像	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>写真：発表を行う見目凌君（植物化学研究室M2）</p>